

まず捨てる物

澄水

「お疲れ様です」

少し高めの男の声が店の裏に響いた。

その声の主は、十代後半の大学生ぐらいに見える男だった。やや細めの体格に、白のシャツの上にベストを着ていた。

時計の針が七時五分を指していた。日が落ちて、窓の向こうは暗くなっていた。

出口近くの机には、トースターのような穴の空いた白いアナログ時計のついた機械があった。その横には青色をした、同じ形の機械があった。彼は白の方の機械にカードを通した。機械はカードを飲み込み、退勤時刻を印字してトースターのように吐き出した。

彼は店の裏口へと向かった。その時、後ろから声を掛けられて立ち止まった。

「高月君、ちょっと待って」

高月、と呼ばれた彼は振り返ると、彼と同じぐらいの歳の女がタイムカードを指していた。身長は高月より若干低い程度だった。

「こんばんは、北山さん」

「高月君、来週の土曜日シフト代わってくれない？」

北山と呼ばれた女はごく普通に尋ねていた。一方で高月は焦って尋ね返した。

「え、何か問題ありましたか？」

「来週部活の用事が入ったから」

「わかりました。ところで、北山さん」

「何？」

「いいえ、何でもありません……」

高月はこの付近の大学に通い、講義が終わってからこの店でアルバイトをしている大学一回生だ。一方の北山も同様で、高月と同じ大学と店に通う二回生だった。

夜の帰り道をゆっくり歩きながら高月は大きく溜息をついた。

「はあ、どうも上手く喋れないな……。告白とか俺には無理じゃないか？」

溜息と共にトーンの低い独り言が零れ落ちた。

以前、高月は気になる人がいると家賃を集めに来たアパートの大家に相談したことがあった。その時の返事は単純だった。単純だった、というよりは簡単だったと言うべきであろうか

「北山さん、仕事もできませんし、人づきあいも上手で、入る隙がないといえますか。せめてもう少し親密になりたいのですが……」

「じゃあ、まずはデリカシーを捨てなさい」

高月は耳を疑った。沈黙が二人の間に横たわった。間を開けてから高月は訊き返した。

「今、何と？」

「デリカシーを捨てなさい」

「馬鹿ですか？」

「わかってないなあ。そんなんだからダメなんだよ」

高月は、まるで懺悔をするように大きくため息をついた。相談相手を間違えた。時間を無駄にした、と後悔した。

「僕が北山さんと話す時に一番失くしちゃいけない物だと思えますよ。あまり嫌われたりしたくないんで。どう話したらいいとか結構考えてますから」

七万五千円を渡し、扉を閉めた。

毎月の集金日は時間の無駄とわかりながらも相談してしまっていた。

相談できる相手もおらず、ただ聞いてほしかったのであろう。大家を馬鹿呼ばわりした後は、高月の中で大きく横たわっていたモヤモヤしたものは薄れていた。

三日後、高月はいつものように講義を済ませて店へと向かった。

店に裏口から入ってタイムカードを通そうとすると、後ろから声を掛けられた。

「高月君」

即座に振り返ると、北山がいた。

「えっと、どうかしましたか？」

高月が訊き返すと、北山は口元に開いた手を当てて小声で話した。

「ううん。問題はないけど、この白い方は時計の時間が四分遅くて、青い方は二分早い。だから、帰りの時は青い方で通さないと損だよ」

「……ぶっ」

高月は吹き出した。

「何かおかしい事言った？」

「いいえ。ただ、意外に器が小さいなど」

北山はやや頬をふくらませるようにして、高月の方を叩いた。

「アハハハ、それは失礼よ」

「すみません」

高月は一步下がりが、プロの営業人のような姿勢で綺麗に頭を下げた。

「……いつも思うんだけど、そんなに縮こまらなくてもいいよ」

「え？ そんなに縮こまってましたか？」

北山に指摘され、勢いよく頭を上げた。その時の表情は驚愕に満ちていた。

北山は人差し指を立てた。

「うん。発言一つ一つが当たり障りのないものというか、飾りっぽいやうか、本音が無い」

「本音……？」

「相手に少し気を使いきるタイプじゃない？」

「確かにそうかもしれませんが」

高月の頭に、大家の発言が浮かんだ。

「あの、アパートの大家さんにある事を相談したら『まずデリカシーを捨てなさい』って言われたのですが」

「へえ……。確かにそうかもね」

「どういう事ですか？」

「いや、相手に好かれようと必死だといろいろと隠していい自分をみせようとするからね。そういうのもある程度は大事だろうけど、本音で言い合っても大丈夫。そんな人の方がいいからね」

北山は肩に置いたままになった手を振り上げて何度も叩いた。

「さっきの失言、本音が出たって感じだったね」

「本音って……。まあ意外でした。北山さんが細かい事気にするタイプ

とは思わなかったので……」

「そうだ、高月君、今日この後暇？」

「はい、暇ですけど」

「一緒に行かない？」

北山は手で棒を持つような動作をした。その手を下に向けて動かした。

「な、何ですか？」

高月が理解しかねて苦笑いしながら尋ねると北山も、わからなかったか、と苦笑しながら答えた。

「打ちっ放し」

「バッティングセンターのゴルフ版のあれですか？」

「そうよ」

「ゴルフ好きなんですか……。すごく意外です。でも、ゴルフした事ありません」

「教えてあげるよ。クラブも貸すから」

「ではお言葉に甘えさせてもらいます」

ゆっくりでいいか、と高月は様々な事を先延ばしにした。